



ICF(国際生活機能分類)を 活用した地域支援体制づくり

(発達障害児者地域生活支援モデル事業
平成30年度、令和元年度の取り組み)

愛知県碧南市
福祉こども部福祉課



愛知県碧南市の状況



- 人口：73, 256人
(R元年12月末)
- 出生数：571人
(H31年1月～R元年12月)

碧南市の状況 3 発達支援体制

平成29年度福祉課に発達支援係の設置
(18歳までの子どもの発達に関する窓口)

- ①保護者支援(発達相談、講習会)
- ②支援者のスキルアップ(巡回支援、研修会)
- ③他機関の連携

＜市長マニフェスト＞
発達障害児対策の
充実

児童発達支援センターは未設置

障害児相談支援事業所2ヶ所

児童発達支援
3ヶ所

放課後等デイサービス
4ヶ所

保育所等訪問支援事業所
1ヶ所

親子通園施設(市単独)1ヶ所
早期療育親子支援事業1ヶ所

巡回支援、支援者向け研修、発達相談の実施 それでもうまくいかないことが...

その原因は

他の機関（場面）
の子どもの姿を
知らない

それぞれの専門性の
視点の相違、専門用
語の違いなどがある

支援方法の
共有がされて
いない

子どもの共通理解に
つながらない

関係機関の連携が
うまくいかない

子どもの困難さの解決につながらない

ICF (国際生活機能分類)とは

(International Classification of Functioning, Disability and Health)

WHO 「障害」の考え方の転換

<今まで>

<2001年～>

障害は人の中にあるもの

障害は環境との間に
生まれてくるもの
(障害者権利条約も同じ考え方)

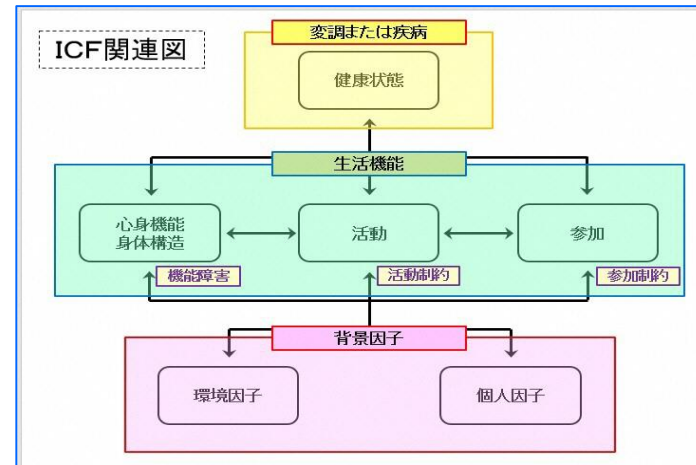
障害があるから
「支援」が必要

暮らしやすい環境がないと障害(困難性)
が増悪!... だから「支援」が必要

ICFは図だけでない。
それぞれ情報把握の項目がある。

↓
項目が膨大(全部で1424項目！)

↓
日本では、研究開発チームにより、
支援に活用できるような研究開発が
進められてきました。



知的障害者、発達障害者の支援における多分野共通のアセスメントと情報共有手段の開発に関する研究

日本医療研究開発機構
平成27年度～29年度
精神障害分野研究開発事業

研究開発チーム: 安達潤(代表)、井上雅彦、内山登紀夫、
神尾陽子、近藤直司、志賀利一、山本彩

ICFの視点に基づく情報把握・共有システムの研究開発

～知的障害・発達障害児者支援における多領域連携の実現に向けて～

安達潤, 発達障害研究 第40巻第4号(1), 336-351, 2018

ICF (国際生活機能分類) (WHO, 2001)

(International Classification of Functioning, Disability and Health)

ICF情報把握・共有システムとは

(碧南市事業ではICFツールと呼称)

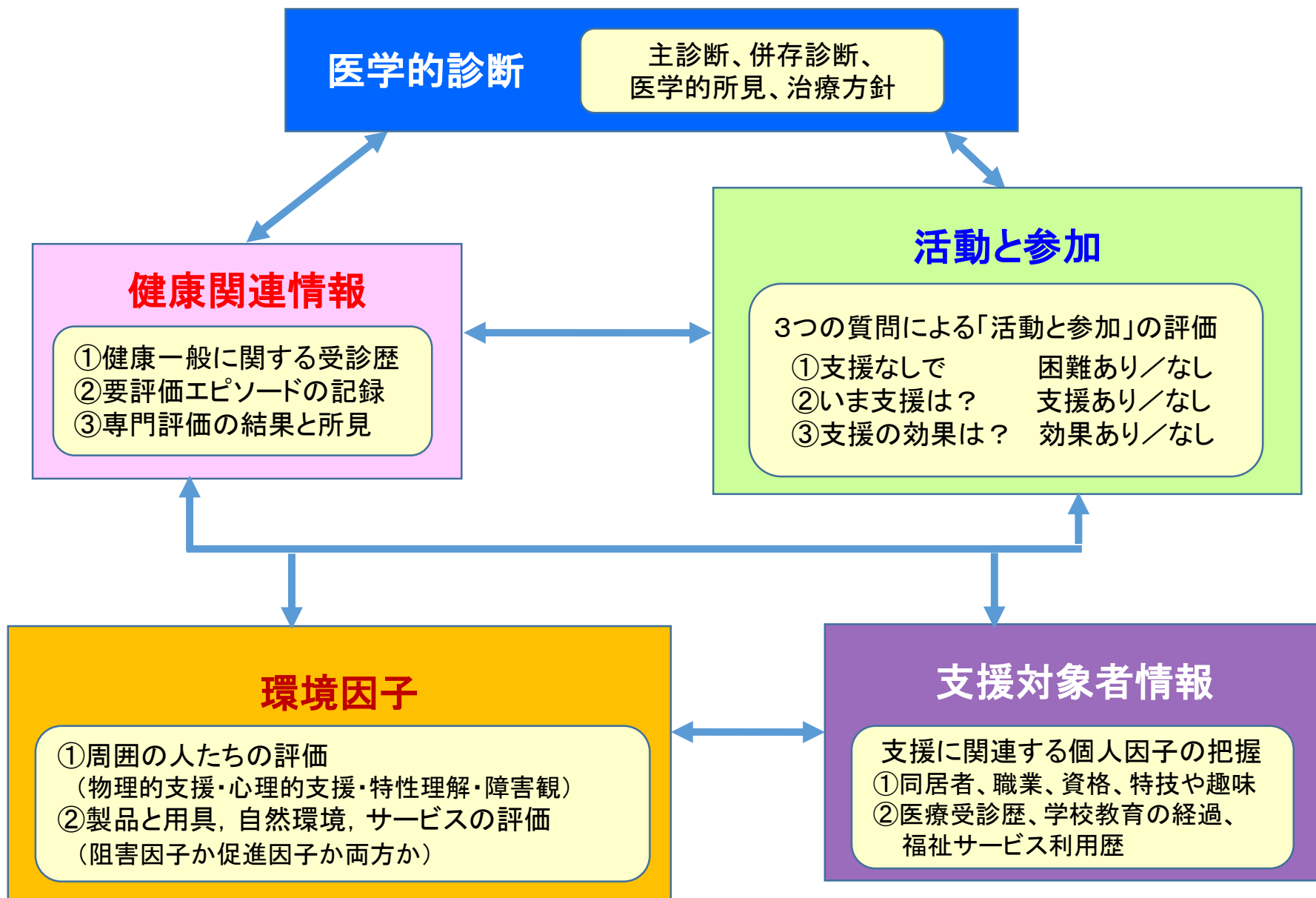
碧南でのキャッチフレーズ

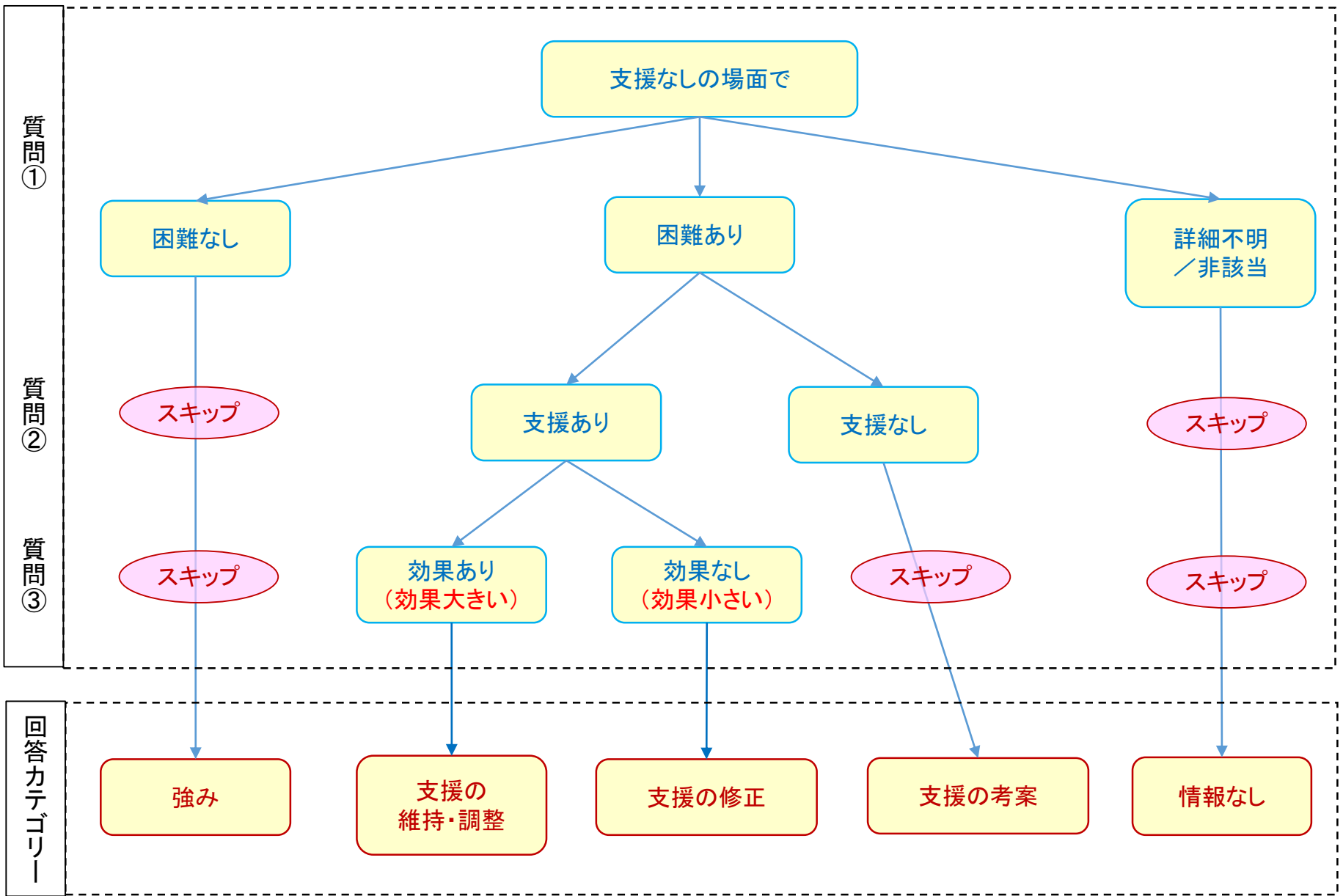
litoko (いいとこ)

Chanto (ちゃんと)

Fueteiku (ふえていく)

情報把握・共有システムの構成





活動と参加の情報把握手順と回答カテゴリー

平成30年度

ICF(国際生活機能分類)を活用した療育支援事業

親子支援教室と親子通園施設の早期療育に通う子ども(モデルケース)に対して、ICF情報把握・共有ツールを活用し、支援関連情報を把握、関係者共有し、効果的な支援構築とその実践を行った。

結果

支援の質の向上

- ・見立てが多角的に(環境調整支援の視点)
- ・支援検討会議の質の向上
- ・個別支援計画の具体性が向上

多領域連携

- ・共通の視点で支援の検討
- ・支援の統一

保護者の変化

- ・子育てに前向きになった
- ・子どもとの関わり方が改善

ICFツールの活用で、地域支援体制を充実していけるのではないかと。

令和元年度 ICF(国際生活機能分類)を活用した地域支援体制づくり

ICFに関する研修と幼児期および学齢期の児童にモデル的にICFツール(安達、2018)を活用することで、碧南市地域支援体制の充実を図り、家庭・教育・福祉の連携を目指す。

ICF研修

- 1 参加者:市内の発達支援に関わる支援者
＜幼稚園、保育園、福祉サービス事業所、相談支援事業所、保護者団体、行政(福祉課、こども課、学校教育課)＞
29名が参加
- 2 講師:北海道大学大学院教育学研究院 安達 潤教授
- 3 日程:7月12日、8月22日、11月8日 9時半～15時
- 4 内容
＜1日目＞【情報収集編】
 - ①子どものよさを伸ばすには ②ICFツール活用の具体的効果
 - ③ICFツールを使った情報収集の方法解説と実技＜2日目＞【第1回支援会議編:「会議資料作成」】
 - ①第1回支援会議の事前準備(情報の分析、支援検討項目の決定方法、支援会議資料の作成方法)
 - ②第1回支援会議の進め方＜3日目＞
【今年度のモデル事業の状況報告】
【会議進行テクニックの紹介】
【第2回支援会議編:「支援がうまくいく条件、いかない条件を見出す」】

モデルケースにICFツールの活用

- ＜ケース1＞
- ・幼稚園年長 男児
 - ・診断名:自閉症
 - ・支援チーム構成:相談支援専門員、幼稚園教諭、児童発達支援事業所支援員、主治医、保護者
- ＜ケース2＞
- ・小学校特別支援級1年 男児
 - ・診断名:自閉症スペクトラム、注意欠陥多動症
 - ・支援チーム構成:相談支援専門員、小学校教諭、放課後等デイサービス事業所支援員、児童クラブ支援員、主治医、保護者
- ＜ケース3＞
- ・小学校普通級6年 男児
 - ・自閉症スペクトラム障害、注意欠陥多動性障害
 - ・支援チーム構成:相談支援専門員、小学校教諭、放課後等デイサービス事業所支援員、主治医、保護者

ICF研修内容のポイント

1 場面とセットで状況把握する

- ・どんな場面なら「できる」かを見つけることの大切さ

2 情報の書き方

- ・具体的に書く
- ・最後は「できる」で終わる。できることに焦点化する。できないことはカッコ内に記入。

3 環境因子の考え方

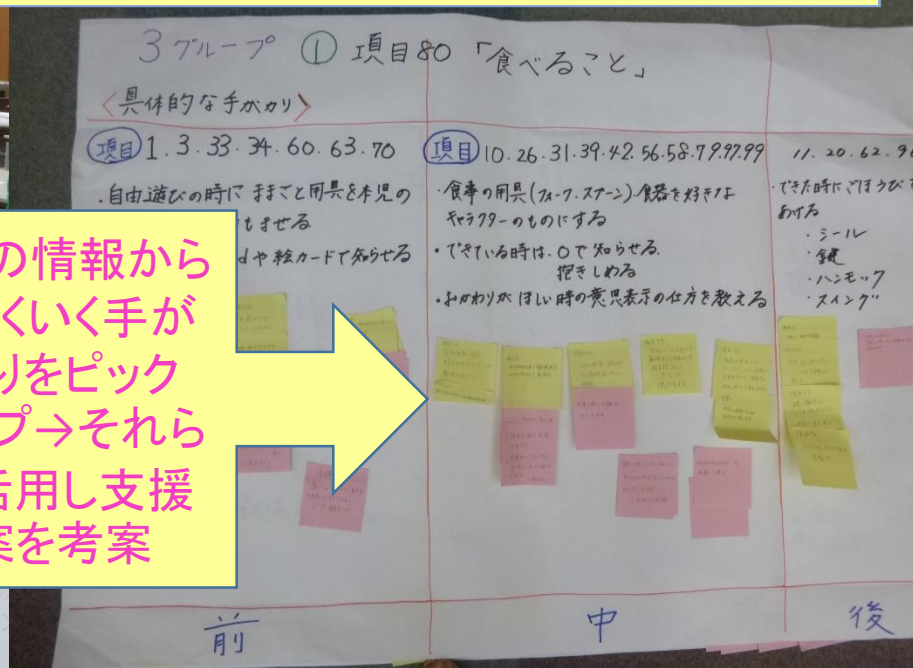
- ・支援を成功させる環境設定は？
- ・調整が必要な環境因子は？

4 実技

- ・「活動と参加」「環境因子」について、情報収集シートを用い実際に記入
- ・情報の分析、支援検討項目の決定方法、支援会議資料の作成方法
- ・支援がうまくいく条件(環境)、いかない条件の見つけ方

ICF研修会の様子

1つの支援項目について
支援案をグループで考案



多くの情報から
うまく手が
かりをピック
アップ→それら
を活用し支援
案を考案

環境への気づきが多くあった



小学校普通級6年 男児 Aくん

<診断名> 自閉症スペクトラム障害、注意欠陥多動性障害

<支援チーム構成> 相談支援専門員、小学校教諭、放課後等デイサービス事業所
支援員、主治医、保護者

ICF活用前の各支援者の思い



学校では特に問題はないけど・・・

学校担任

ボク困っているんだけど・・・

家ではパニックや不眠があって、今後のことが心配・・・



保護者



学年が変わってから、嫌がっていた勉強をするようになったけど、なぜだろう？

事業所支援員



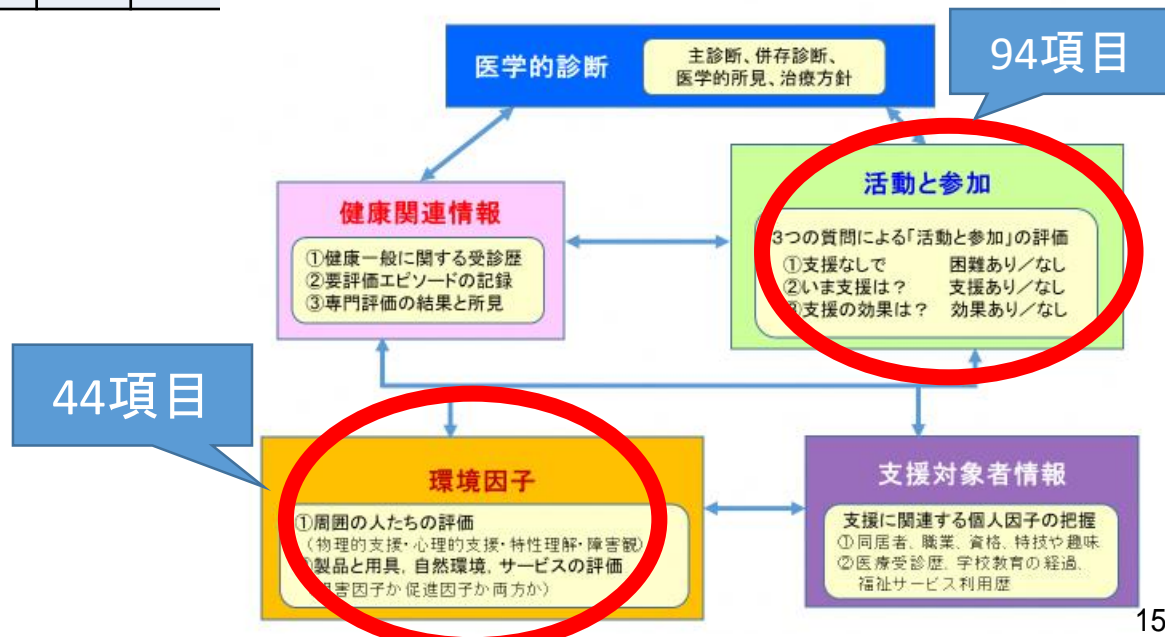
病院 主治医

特性が強いが家の外では感情を表出しないため、一見適応できているように誤解されがち

年間の流れ

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
研修		第1回	第2回			第3回				
活用事例		情報収集開始		第1回支援会議	支援の実施			情報の再収集	第2回支援会議	支援の実施

ICF図式による情報把握・共有システム



情報収集役割分担

活動と参加

(支援員1人当たり約20項目)

家庭でしか分からない部分は、保護者に聞き取り

チームで分担することで、1人当たりの負担が少なくなる

内容	項目数	担当
第1章 学習と知識の応用	27	学校(10)、放デイ(17)
第2章 生活の中で求められる課題	9	学校(8)、放デイ(1)
第3章 コミュニケーション	16	学校(2)、放デイ(14)
第4章 運動・移動	15	放デイ(15)
第5章 セルフケア	8	学校(1)、放デイ(7)
第6章 家庭生活	2	放デイ(2)
第7章 対人関係	6	学校(3)、放デイ(3)
第8章 遊び、娯楽	9	学校(2)、放デイ(7)
第9章 コミュニティライフ・社会生活	2	放デイ(2)



第1章 学習と知識の応用の項目例

項目タイトル	項目タイトル
d110)目的をもって見る	d150)計算の理解と習得
d115)目的をもって聞く	d1310-2)物を扱う遊びを通して学ぶ
d120)目的をもって触る・嗅ぐ・味わう	d1313-4)見立てやフリを通して学ぶ
d129)目的を持つその他の感覚経験	d155)必要な生活スキル(行為)の習得
d130)まねをして学ぶ	d159)その他の基本的学習活動
d132)知らないことを質問する	d160)何かに対する注意集中
d133)ことばの習得と使用	d161)課題(作業)完了までの注意持続
d134)代替・補足的言語手段の習得と使用	d166)実生活で読むこと
d135)繰り返して練習する	d170)実生活で書くこと
d137a)物の特徴の概念学習	d172)実生活で計算すること
d137b)心の状態の概念学習	d163)思考すること
d140)読むことの理解と習得	d175)問題を解決すること
d145)書くことの理解と習得	d177)意思決定すること
	d179)知識の応用(その他)

計94項目

具体的な記入例(強み)

	項目タイトル	支援なしで	補足情報
強み	d120)目的をもって触る・嗅ぐ・味わう	困難なし	濡れたハンドタオルを渡すことで落ち着く。よく頬に当てている。
強み	d130)まねをして学ぶ	困難なし	
強み	d135)繰り返して練習する	困難なし	毎週行った漢字テストでは、全10回すべて満点であった。また学期末の100問テストでは1回目80点、2回目84点、3回目91点であった。
強み	d140)読むことの理解と習得	困難なし	
強み	d1310-2)物を扱う遊びを通して学ぶ	困難なし	レゴが好きで何時間でも集中できる。
強み	d166)実生活で読むこと	困難なし	
強み	d170)実生活で書くこと	困難なし	
強み	d210 b)集団での単一作業・活動	困難なし	図書委員で図書館へ行く時は、周りの子の動きを見て教室に戻るようになっている。

具体的な記入例(支援維持・調整)

	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
支援維持・調整	d132)知らないことを質問する	困難あり	支援あり	大きい	①困難の状況:集団の場合、質問をする事ができずパニックになる事がある。 ②支援の内容:関係性のある指導員が隣に座る。 ③支援の効果:関係性のある指導員が側にいることで落ち着いて質問する事ができる。
支援維持・調整	d150)計算の理解と習得	困難あり	支援あり	大きい	①困難の状況:分数の掛け算、割り算で、①掛け算に直す、②約分する、③掛け算するといった作業が混じってしまう。 ②支援の内容:1つずつ式を書いて解しようと伝えたり、繰り返し練習したりする。 ③支援の効果:学期末まとめテストでは①40点、②48点、③54点、④92点と進歩している。
支援維持・調整	d161)課題(作業)完了までの注意持続	困難あり	支援あり	大きい	①困難の状況:課題によって注意の集中力に差がある(図工の絵画は◎、計算ドリルは△) ②支援の内容:集中力がない時には、こまめに声をかける。やる気がないのか、分からないのかの判断を的確にし、声かけをする。 ③支援の効果:判断を間違えなければ一人で作業ができる。 ④その他 :不安なことがあると一つずつ細かく確認をしに来る。その都度「大丈夫」と声をかけると安心して取り組むことができる。

具体的な記入例(支援修正)

	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
支援修正	d145)書くこと の理解と習得	困難あり	支援あり	小さい	<p>①困難の状況:作文を書く際、何を書けばよいか 思い浮かばない。</p> <p>②支援の内容:具体的場面を設定し、その時どう 感じたのか、まずは口に出して話してみる。</p> <p>③支援の効果:箇条書きであれば文を作ることが できる。</p>
支援修正	d172)実生活で 計算すること	困難あり	支援あり	小さい	<p>①困難の状況:時計を見て時間を把握する事が苦 手。学校では、放課の終わりのチャイムがいつ鳴る のか分からないため、外に遊びに行けない。</p> <p>②支援の内容:自宅でゲームをする際などはタイ マーで時間を計っている。事業所でもタイムスケ ジュールで見える化、残りの時間の声掛け、現在 の時刻の確認をしている</p> <p>③支援の効果:学校では不安感が強く出ている。</p> <p>④その他 :「6時」など区切りのよい時間は分か るが、中途半端な時間だと間違えてしまう</p>

環境因子の項目例



環境因子の項目 具体的内容例

ペット・団体/製品と用具	悪影響	好影響	自然環境と環境変化	悪影響	好影響
仕事のしやすさを支援するために工夫・改善された製品	なし	あり	光	なし	あり
一般的な遊び用の製品と用具	あり	なし	空気	あり	なし
学習のための用具	あり	なし	湿度	あり	なし
日常生活で使う用具	あり	あり	天気の状態	あり	なし
情報の受信や発信の用具	あり	あり	自然災害	あり	なし
生活圏内の動物	あり	あり	人為的環境変化	あり	なし
			音	あり	あり

ペット・団体/製品と用具	悪影響	好影響	自然環境と環境変化	悪影響	好影響
仕事のしやすさを支援するために工夫・改善された製品	なし	あり	光	なし	あり
タイマーがあると安心できる	あり	なし	空気	薄暗いところを好む	
学習のための用具	あり	なし	湿度	臭いに敏感に反応する	
日 消しゴムを持つと小さくなるまで消し続け、勉強しない	あり	あり	天気の状態		
情報の受信や発信の用具	あり	あり	自然災害	あり	なし
生活圏内の動物	あり	あり	人為的環境変化	あり	なし
			音	あり	あり

実際の情報共有フォーマット(A3 1枚に情報が網羅)

ICF評価システム 情報共有フォーマット

支援対象者		
支援者ID		
支援対象者ID		
年齢	11歳9ヶ月	
健康関連情報		
記録日		
健康関連情報		
専門評価1	目的	方法
所見		
専門評価2	目的	方法
所見		
専門評価3	目的	方法
所見		
専門評価4	目的	方法
所見		
手入力項目		
専門評価のまとめ		

**健康関連情報
(コメディカルの所見等)**

医師の診断	
主診断1	主診断2
自閉症スペクトラム	注意欠陥多動症
併存診断1	併存診断2
主診断1	主診断2
不眠症	夜尿症
併存診断1	併存診断2
自閉症スペクトラム症・注意欠陥多動症(不注意優勢)・特性	
医師の診療方針	
ADHDにはストラテラ40mg/d、不眠にはベンゾラ15mg/d、リポトール0.5mg/dを処方していたが服薬は必要時に限られている(母の判断)。夜尿症は近医小児科フォロー。特性に起因する集団生活上の負担感を周囲に理解していただき、本人が無理なく継続できる環境の構築を目指す。	

医師の所見

活動と参加	
活動と参加	項目記述の説明
d1**) 学習と知識の応用	d3**) コミュニケーション
d2**) 生活の中で求められる課題	d4**) 運動と移動
d5**) セルフケア	d6**) 家庭生活
d7**) 対人関係	d8**) 遊び、教育、仕事と経済活動
d9**) コミュニティライフ	社会生活・市民生活
記録日	
活動と参加	活動と参加
強み	支援維持・調整
支援修正	支援課題
目的をもって見る	書き言葉の理解
目的をもって読む	自分の感情・言葉の理解
目的をもって聴く・かく・味わう	話し言葉の理解と習得
まねをして学ぶ	声による情報伝達
ことばの意味と理解	繰り返す練習
繰り返す練習	繰り返す練習
読むことの意味と習得	読むことの意味と習得
物を取りかきを通して学ぶ	算数の理解と習得
算立てや計算を通して学ぶ	必要な生活スキルの習得
必要な生活スキルの習得	何かに対する集中力
何かに対する集中力	実生活で読むこと
実生活で読むこと	実生活で書くこと
実生活で書くこと	実生活で書くこと
1人での単一作業・活動	1人での単一作業・活動
集団での単一・複数作業・活動	集団での単一・複数作業・活動
集団での目標達成	集団での目標達成
集団に合わせた行動コントロール	集団に合わせた行動コントロール
話し言葉の理解	話し言葉の理解
声によるメッセージ理解	声によるメッセージ理解
表情やジェスチャーの理解	表情やジェスチャーの理解
支援課題に有用な活動・参加状況のまとめ	今後の支援課題となる活動・参加状況のまとめ
自分一人で行えること(強み)はたくさんある。まねをして学んだり、言葉での理解もできる。また会話などのコミュニケーションもできる。体を使うこともできる。またお手伝いが好きで、家庭や事業所でもよく行っている。一方で、知らないことを質問したり、辛い時に表現できずにパニックになるが、関係性のある支援員(担任や指導員)が話しを聞き、具体的に確認することで落ち着いて対応できる。また、計算でいくつかの作業がはいると上手くないが、1つずつ伝え繰り返し練習することでできるようになる。しかし、本人は学校生活において不安が強い。	時計をみて時間を把握することが苦手なため、学校生活で見通しがたず、自分がどのように行動してよいか分からず不安が強い。身だしなみや衣服の調整が苦手。

活動と参加

環境因子					
記録日					
環境因子					
高関の人たち	物理的支援	心理的支援	特性理解	障害統	まとめ
e3-410) 家族や近い親族	助言が必要	助言が必要	助言は不要	拒絶感あり	
e3-415) 親族	助言が必要	助言が必要	助言は不要	拒絶感あり	
e3-420) 友人	助言が必要	助言が必要	助言は不要	拒絶感あり	
e3-425) 知人、仲間	助言が必要	助言が必要	助言は不要	拒絶感あり	
e3-430) 教師や雇用	助言が必要	助言が必要	助言は不要	拒絶感あり	
e3-435) 組織の中で	助言が必要	助言が必要	助言は不要	拒絶感あり	
e3-440) 対人サービ	助言が必要	助言が必要	助言は不要	拒絶感あり	
e3-445) 一時的に開	助言が必要	助言が必要	助言は不要	拒絶感あり	
e355-450) 医療・保	助言が必要	助言が必要	助言は不要	拒絶感あり	
e360-455) その他	助言が必要	助言が必要	助言は不要	拒絶感あり	
その他の環境因子					
ペット・同居家族	ペット・同居家族	ペット・同居家族	ペット・同居家族	ペット・同居家族	まとめ等
仕事上のしやすさを支援するために工夫・改善された製品	なし	あり	なし	あり	・薄暗いところを好む。
一般的な用途の製品と用具	あり	なし	あり	なし	・臭いに敏感に反応する。
学習のための用具	あり	なし	あり	なし	・臭いに敏感に反応する。
日常生活で使う用具	あり	あり	あり	なし	・蒸し暑い季節が嫌い。
情報の受信や発信の用具	あり	あり	あり	なし	・雨や台風が嫌いで落ち着かなく。悪天候はテレカの速報を気にし、聞くことで恐怖を感じる。
生活圏内の動物	あり	あり	あり	なし	・運動会などざわついた音、小さい子の声が苦手。習っている太鼓・金管バンドは大丈夫。
ペットや家畜	あり	あり	あり	なし	
サービス					
教育と訓練の関連サービス	利用	あり	なし	あり	・放課後等デイサービスのスタッフには安心して打ち解けている
身体やデジタルの関連サービス	利用	あり	なし	あり	・速報やニュースを盛んに確認する。確認しても落ち着かないが、確認しないと落ち着かない。
情報メディアのサービス	利用	あり	なし	あり	

環境因子

支援対象者	
記録日	
支援対象者情報	
同居者	
結婚	
職業	
資格	非該当
宗教	無宗教
特技や趣味	手先が器用でレゴで遊ぶことが好き お手伝いをよくしてくれる
医療サービス利用歴(医療受診の有無)	1-4歳 5-14歳 15歳以上 なし 有
学校教育経過(特別支援教育の有無)	幼児 小学 中学 高校 なし 有
福祉サービス利用経過(サービス利用の有無)	なし 有
支援対象者情報 全体のまとめ	

支援対象者情報

ICFツールを活用した支援会議

アナログ時計が読
めない

次の授業がい
つ始まるかわ
からない。

4時から5時
になる時など
の、短針が特
にわからない。



テストで時間
がどのくらい
あるかわから
ない

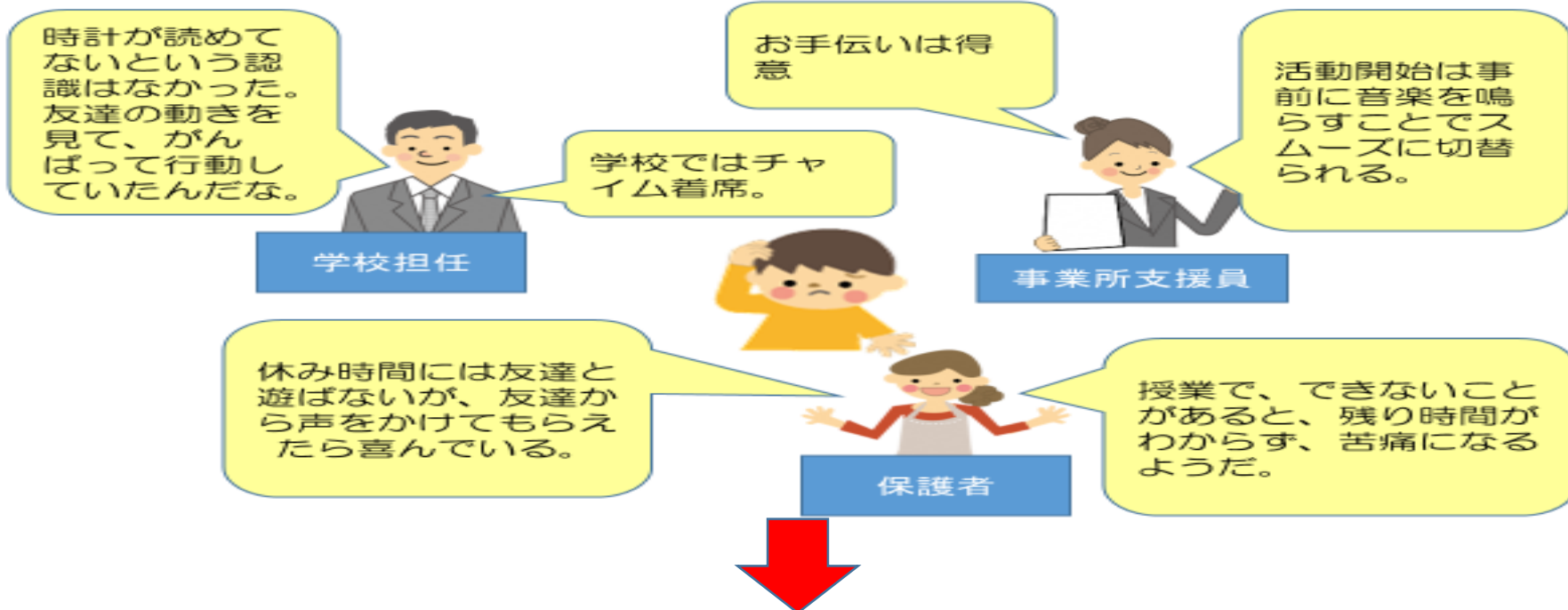
家では30分の
長さがわから
ないので、タイ
マーを使ってい
る。

放デイでは、
活動の切り替
え時に音楽を
ならすとス
ムーズに行く。

支援検討項目：時計を読むこと

支援会議

具体的に網羅された情報をもとに参加者で意見交換(一例)



具体的に網羅された情報をもとに、子どもの共通認識

共通認識

(一例)

- ・時計が読めないので、学校では次の行動への不安が高い
- ・本児は人に迷惑をかけない事を重視している
- ・友達との関わりを望んでいるがうまくいっていない
- ・不安を取り除いてあげる支援が必要！

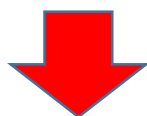
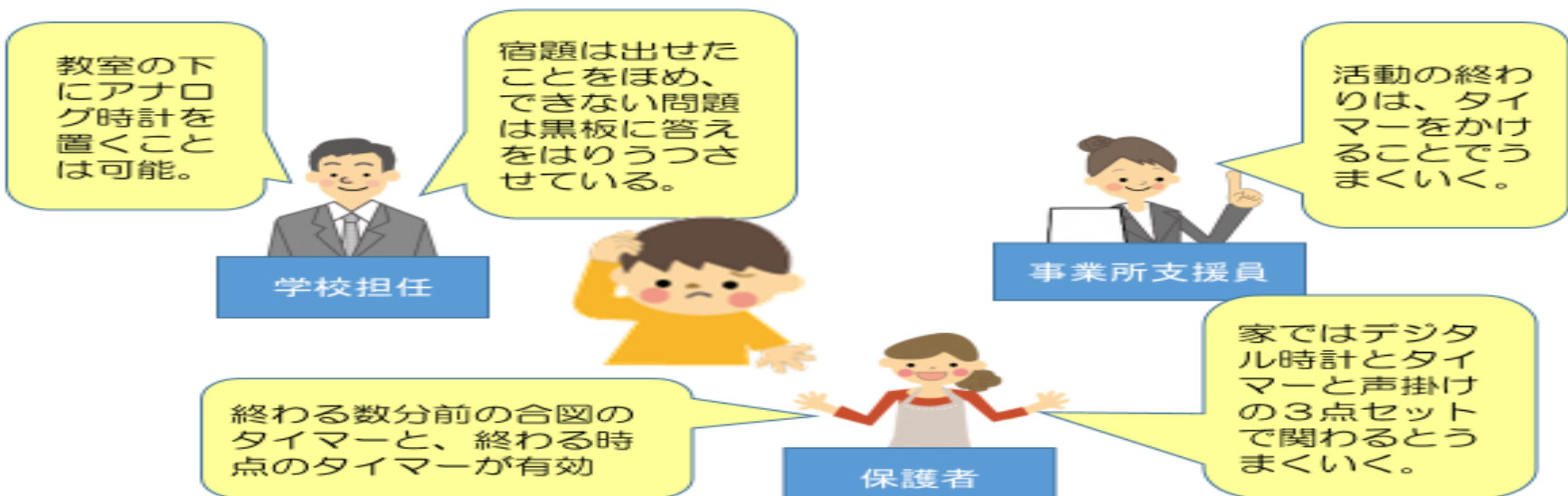
事業所支援員

学校担任

保護者

支援会議

具体的に網羅された情報をもとに具体的な支援方法を検討(一例)



支援方法の統一

(一例)

- ・教室のアナログ時計の下にデジタル時計を置く。
- ・タイマーの活用(終了前と終了時の2回鳴らす)
- ・声掛けの仕方(やっていることは認めほめ、できていないことは、励まさずに方法を教える。)
- ・時間を読むこと、時間の感覚を通級で対応。



事業所支援員



学校担任



保護者

支援会議の内容

第1回支援会議

- ICFツールにより、子どもの姿を共通認識、より深く情報交換⇒子どもの強みの発見、子どもの気持ちを深く想像
- 具体的な手がかり(子どもの姿)を基に支援案の検討⇒支援の統一

第2回支援会議

- 第1回目で考案した支援の結果を共通理解
- その子の支援が「うまくいく条件」「うまくいかない条件」を見い出す
- 支援の修正

子どもの状態を網羅的に具体的に見た結果である

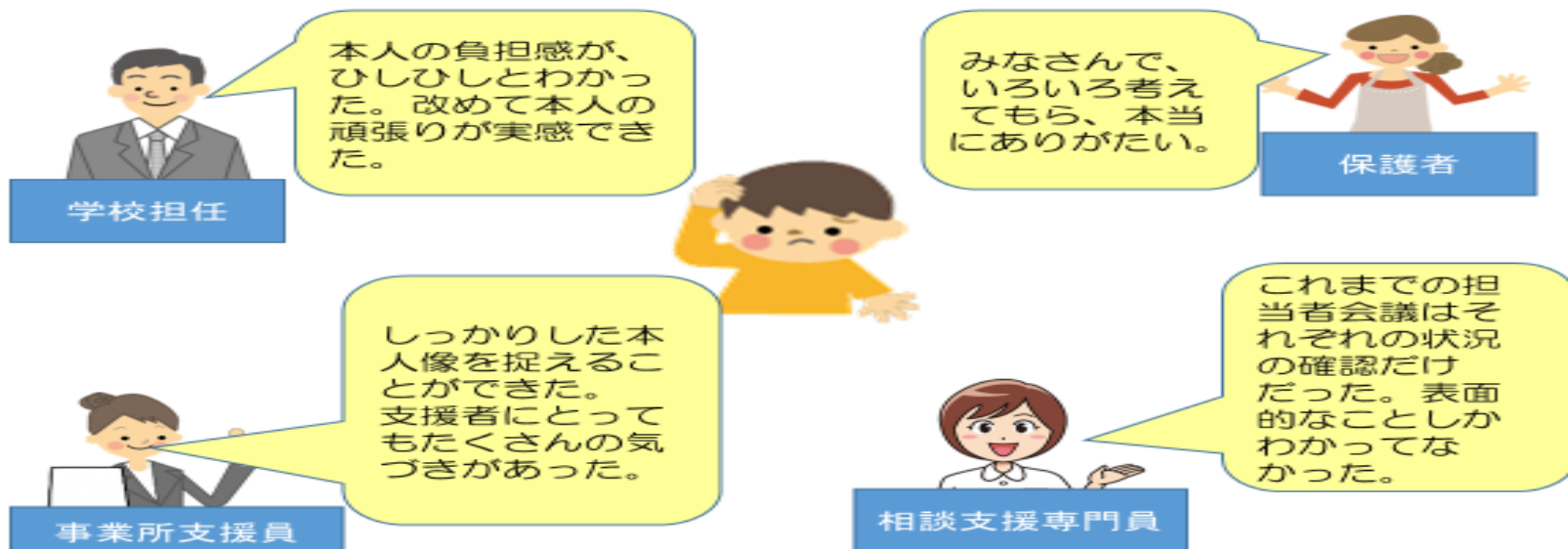
「環境」を整えることで、子どものできることが広がるというICFの考えを集約

支援者の思いの変化

ICF活用前



ICF活用後



ICF研修

1 支援者のスキル向上

- ①情報収集のスキルアップ：情報を具体的に書く、場面とセットで状況把握することで支援の効率化につながる
- ②支援の考案方法：具体的な情報（手がかり）から支援を考える、支援結果からうまくいく環境（条件）を考える
- ③支援会議の効果的な進め方

2 多職種連携

子どもの姿の共有（文字資料だけでも実際の子どもの姿をイメージできる）

「具体的に情報を書く」「場面とセットで把握する」「環境をみる」「会議をスムーズにすすめる」ことなどは、ICFツール活用に限らず普段の支援に重要 ⇒ 地域支援体制の充実につながる

モデルケースへのICFツールの活用

1 子どもを見る視点の変化(困難を子どもの視点に立って見ることができた)

- ①いろいろな場面での情報を共有し、子どもの困り感に気づく
- ②今までは支援者の困り感で子どもを捉えていたことに気づく
- ③できる場面、できない場面を環境と合わせて考えることができた

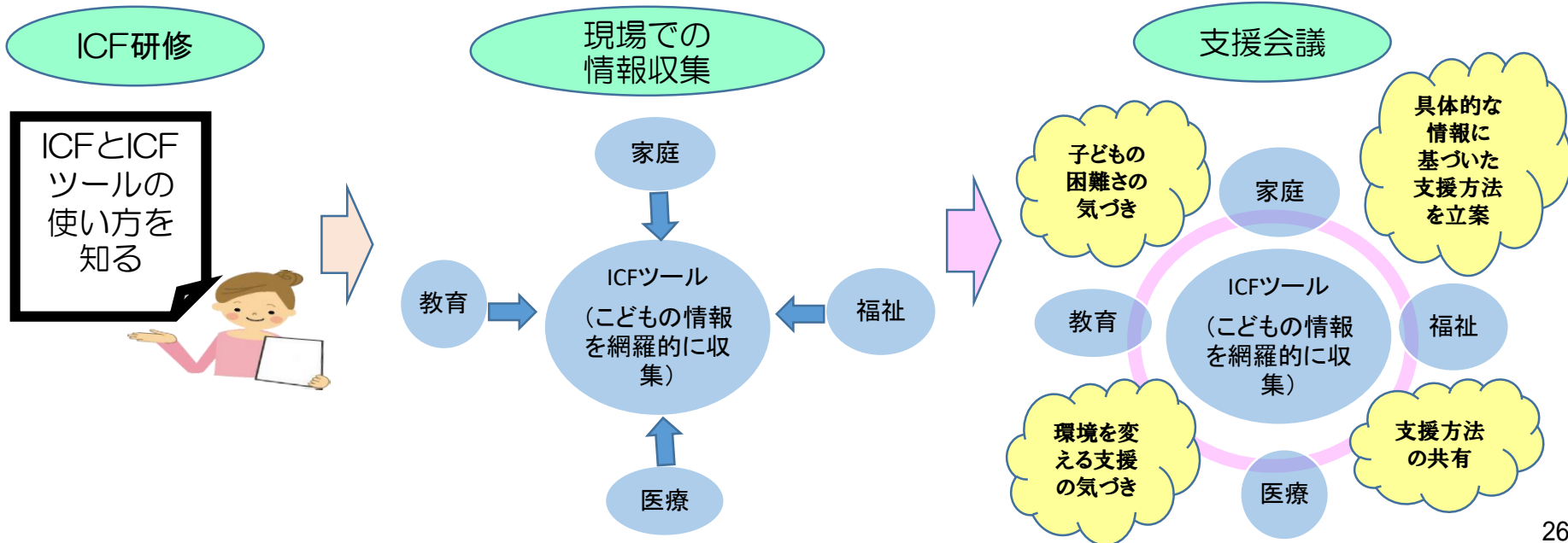
2 家庭・教育・福祉の連携

- ①子どもの姿の共有(他の場面での具体的な様子を知ることができた)
- ②支援方法の共有（支援の統一と他の場面での効果的な方法も共有）

3 保護者支援

家庭での困り感を教育機関や福祉機関と共有でき、孤立感の解消

「ICFツールによる網羅的な共通項目に基づく子どもの情報把握」と「情報を共有し理解を深めあう場(支援会議)」の設置で、子どもを見る視点が変わり、具体的な支援方法を環境場面と合わせて考えることができ、支援の共有ができた



ICFを活用した地域支援体制づくり まとめ

・「ICFツールによる網羅的な情報把握」と「情報を共有し理解を深めあう場（支援会議）の設置」により、支援者の質の向上、家庭・教育・福祉の連携、保護者支援につながる。

ICF活用の課題と今後の取り組み

1. 情報収集の項目数が多く、作業量が多い
 - ★発達障害のICFコアセット導入で項目数を減らした情報把握シートの活用等で作業量の負担軽減をする
(北大で開発中:項目数は大凡半分程度になる見通し)
2. ICFの考え方がまだ浸透していない
 - ★ICF研修を継続(ICFとその活用方法の知識を地域の支援者に広く普及する)
3. 継続していくことが大切

ご清聴ありがとうございます
ございました

Iitoko いいとこ

Chanto ちゃんと

Fueteiku ふえていく

ICFで みんな つながる

ICFで みんなが そだつ